

「国語教育研究」第五十九号（平成三十年三月刊）

# アクティブラーニング型授業「舞姫」の場合

——発表資料に見られる認知プロセスの外化——

小川 満江

## 1 はじめに

「舞姫」は高等学校現代文の定番教材であり、多くの教科書に採録されている。ただ擬古文であり、生徒にとって言葉の抵抗が大きいので、生徒実態に応じて扱ったり扱わなかったりしてきた。

平成二三（2012）年度から今年度までは毎年、尾道北高校三年文系生徒を対象にして、生徒の主眼的活動を中心にした「舞姫」の授業を実施している。平成二二年度まで実施してきた夏目漱石の「こころ」を教材としたアクティブラーニング型授業での方法を勘案しながら単元計画を練った。「こころ」の授業を実施した時のクラスは、習熟度別・ホームルーム単位文系・ホームルーム単位理系のクラスで、人数や生徒実態はさまざまに試行錯誤しながら単元を実施してきた。平成二三年度から今年度まで担当している現代文の授業クラスは習熟度別で、発展・応用的な内容も授業の中に取り入れているクラスであり、人数は二〇人程度である。各生徒の古典文法の基礎力やある程度の語彙力は定着しており、時間がかかっても自力

で「舞姫」を通読し、注釈を参考にしながら大体の内容を読み取ることができるといえる。実態や人数がほぼ同じであるので、各年度とも一人ひとり発表を担当する箇所を決め、生徒の発表・質疑・意見交換を中心にした授業を行った。ただ、授業の方法については前年度の反省を踏まえたり、生徒の反応や取り組み方に応じて変えているところもある。

溝上慎一氏は「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」とアクティブラーニングを定義する。また堀哲夫氏は外化と内化について「学習者が自らの認知過程を表出するこの一連の活動と結果を外化という」「内化の前提として内省が行われている」とすると、内化とは外にあるものを自分の認知過程の中に取り入れることであるが、そのとき自分自身の認知構造の再編成がおこなわれることまでも含めて考える必要があるだろう。このように見えてくると、認知過程の外化は、自分自身の認知過程を具体的に観察可能な形にするという点において内省および内化

の促進にきわめて重要な役割を果たすことになり、両者を切り離して考えることはできないといえよう」と述べている。

「舞姫」の授業を通してアクティブラーニング型授業における生徒の認知プロセスの外化と内化について分析してきた。①発表資料に見られる認知プロセスの外化、②授業中のやりとりにおける認知プロセスの外化と内化、③まとめ学習に見られる認知プロセスの外化と内化、として整理している。本報告は①についてまとめたものである。

## 2 単元の展開

単位数は3単位で、各年度とも18時間程度かけて展開している。

「授業の進め方の確認と担当範囲の決定（1時間〈資料1〉」「発表資料の作成（2時間）」「生徒の発表と質疑（13時間）」「まとめ学習（1～2時間）」である。

## 3 発表資料の形式と内容

発表資料の形式は二つのタイプにしている。

I 平成二三、二四、二五年度は発表資料の形式はほぼ同様であるが、手順を少し変えている。学習の手引きに記している手順は、二三、二四年度が「○担当箇所から、各自が読解、解釈する上でキーになる語あるいは語句を三つ抜き出す。（評論文等を読解する上でキーワードではなく、各自が語するためのキーワードととらえる。）○

キーになる語、語句を軸に各自の解釈・感想等をまとめる。」であり、二五年度は「担当箇所から、本文中の語句や文を三つ挙げ、その語句に即して、読み取ったこと、気づいたこと、感じたこと、疑問点などをまとめる。（疑問点については、疑問点を挙げるだけでなく、自分なりに考えたこともまとめておく）」である。資料の形式はA4版両面で、表に「気づき・解釈・感想等」をまとめ、裏に「語句の意味」「全体を通して―感想・考えてみたいこと」を記すようにしている。資料2は二四年度生徒が作成した発表資料例である。平成二九年度は二五年度と同様のものを使用した。

なおキーワードを挙げて解釈した内容を整理させる取り組みを初めに行ったのは平成一五（2003）年度で、この時は一場面に複数の生徒を割り当て、資料を作成させた。質疑の時間は少し取ったものの、報告中心の授業を展開している。

平成二三、二四、二五年度の生徒が取り上げていた語、語句、文を、資料3のように整理した。年度や生徒の違いはあっても、取り上げられた語や語句には、共通のものも多かった。

生徒は選択した三つの語や語句を軸に読み取ったこと・解釈・気づき・感想・疑問に思うこと等を自分の言葉でまとめており、単に現代語に言い換えただけのものはわずかであった。

次はテキストを①～⑭7の場面に分けて、資料3に示している語・語句・文をもとに、生徒がどのように認知プロセスを外化したのか、その要点を発表資料の記述をもとにまとめたものである。特に各年度共通して挙げられている言葉を中心にして整理した。

①(1・2・3) ※( ) 内の数字は形式段落番号である。

石炭をははや積み果てつ(A・C)≡文字通りの意味をとったものと助動詞「つ」に着目して豊太郎の悔恨につなげたもの。

別に故あり(A・B)人知らぬ恨み(A・B)≡豊太郎の心の動きと悔恨の思いで激しく悩み苦しんでいる心。

②(4・5・6・7・8)

我を襲ふ外物を遮りとどめたりき(A・B・C)≡意気揚々と伯林に到着した豊太郎の姿、豊太郎の決意の強さ、故郷を思う気持ちの強さ。政治学を修めん(B・C)≡豊太郎の志。慎重さや先見性に欠けている一面。

③(9)

好尚(B・C)奥深く潜みたりしまことの我(B・C)昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり(A・C)大学(B)≡豊太郎の本性や自我の目覚め、心の変化。

広言しつ(A・C)≡豊太郎の目に見える変化。

④(10・11・12・13)

我が心(A・C)我が本性(A・B・C)勇氣(A)弱くふびんなる心(B)≡豊太郎の弱さの分析(外物を恐れる弱さ、精神力の弱さ)。自分の弱さに日本にいる時にも薄々気づいていたかもしれないが、ドイツでの体験を重ねるうちにはつきり自覚したのだという見解。自分を冷静に客観視し、周囲の嘲りや嫉みに堪えている豊太郎の姿から並々でない精神力の持ち主だとする捉え。

⑤(14・15・16・17・18・19・20)

恍惚(A)≡出会いの前の静かな時間。

憐憫(A・B・C)≡エリスと初めて出会った時の豊太郎の心情。エリスに魅力を感じている豊太郎の様子。エリスの状況やエリスから見た豊太郎の印象。

⑥(21・22・23・24・25)

※エリスの家を訪れる場面で、さまざまな語句があげられ、人目を気にする豊太郎やエリスの貧しい暮らしぶりや母親の行動をまとめていた。

媚態(A・B・C)≡エリスの意図的なものか、もともとの気質なのか、どちらにせよここで豊太郎がエリスに魅力を感じ、想う気持ちが芽生えているという捉え。

時計(A)≡豊太郎の誠実さ。豊太郎自身エリスとの関係の発端がここにあったと気づいたのではなからうかという考え。

⑦(26・27・28・29)

※豊太郎に状況の変化が起こる場面で、ここでもさまざまな語句があげられていた。

舞姫の群れに漁するもの(A)≡同郷人の豊太郎への見方。

旨(C)≡豊太郎が窮地に立つことになったことの要因。

母の死(B)≡衝撃や日本から遠のく思い。

舞姫(B)≡舞姫のはかない身の上を豊太郎と重ねる捉え方。

余は彼が身の事にく秘めたまへ(C)≡エリスを傷つけないとする豊太郎の思いや豊太郎と離れたくないというエリスの思い。

我が一身の大事は前に横たはりて(A・C)≡免官され、日本に帰るかドイツに滞在するかの選択を迫られている豊太郎の状況。

離れがたき仲(B)≡エリスとの関係の深まり。

⑧(30・31・32・33)

身の浮かぶ瀬あらじ (B) 免官 (A) 豊太郎の状況と葛藤。

相沢謙吉 (A・B) 豊太郎のよき理解者で問題を解決してくれた相沢像。

助けの綱 (B・C) エリスにも助けられて憂きが中にも楽しき月日を送っている豊太郎の生活。

休息所 (C) 通信員としての仕事をしている豊太郎の様子や集まっている人たちと豊太郎たちとの違い。

⑨(34・35)

学問 (A・B) 豊太郎の他者とは違うというプライドや、身につけた新しい価値観。「されど」や「一種の見識」にも着目

一隻の眼孔 (B) 留学生 (A・C) 豊太郎の自分の能力への自負。

⑩(36・37/38・39・40)

冬は来にけり (A) 雀の死 (A・B) 季節の変化・冬の寒さ。豊太郎の身の大きな変化への兆し。

心は楽しからず (A・C) エリスの妊娠による、生活や豊太郎自らの運命に対する不安。

不興なる面もち (A・B) チャンスに乗り気にならない豊太郎の気持ち。

我が豊太郎の君とは見えず (A・C) 富貴 (B・C) 見棄てたまはじ (B・C) エリスの不安や予感。

⑪(41・42・43/44・45・46)

相沢 (A) 生路 (B) 諫むる (A) 相沢の人物像、豊太郎との対比。弱き心 (B) この場面での豊太郎の弱さ。

棄て難きはエリスが愛 (C) 余は守るところは否とはえ答へぬが常なり (C) 自己矛盾に苦しむ豊太郎の姿。

信用 (B) 豊太郎の才能。

寒さはことさらに堪へがたく (A・C) 一種の寒さ (C) 豊太郎の苦悩や心情の変化。良くないことが起きることへの暗示。

⑫(47・48/49・50)

いかで命に従はざらん (A・B・C) 葛藤していた豊太郎の、即座に承諾・選択した行為。

偽りなき我が心 (A・B) エリスの豊太郎への信頼と豊太郎の気持ちの変化。

心細きこと (A) うしろめたがる (A・C) エリスのことを気がかりに思う気持ち。

仏蘭西語を余なりき (A) 自分は栄光の世界に相應しいのだという豊太郎の自信。

⑬(51・52/53・54)

エリス (B) 文 (A・B) エリス像。豊太郎の心をつなぎとめようとするエリスの思いや心細さ。

灯火 (A) エリスの心細さや寂しさ。忘れざりき (A) 手紙がなかったらエリスのことを忘れていたのだろうかという見方。

地位 (A・B・C) 「地位」の解釈。手紙を読んで始めて大臣の信頼が出世の可能性につながることに気づく豊太郎。相沢との関係。

⑭(55・56・57/58・59・60)

独逸に來し初めに誇りあしにあらずや (C) 糸 (A) 結局変わっ

ていない豊太郎像。

寂然たり (B) 豊太郎の思い。

我が心 (A) 低徊踟躕 (B) 豊太郎の迷い。

襦袢 (A・C) 黒きひとみ (A・C) あだし名 (B・C) 涙満ちた

り (A・C) 豊太郎の豊太郎に対する切実な思いや不安。エリスの思  
いがかえつて豊太郎の心をエリスから離すことになったという見方。

15 (61・62・63・64／65・66・67)

相沢 (C) 特操なき心 (A) 承りはべり (A) 豊太郎の弱さ。

帰りにエリスに何とか言はん (C) 心の錯乱 (B) エリスへの申し  
訳なさをすすべもなくなっている豊太郎の状態。

罪人 (A・B・C) 豊太郎の罪悪感や自己嫌悪、自分を責める気持  
ち、後悔。

一星の火 (A) 豊太郎の身勝手さから自らの人生や気持ちを翻弄さ  
れたエリスの姿。

痛み (A) 身体の痛みだけでなく罪悪感による心の痛み。

雪 (A) 豊太郎とエリスの人生を翻弄する周囲や運命。

16 (68・69・70・71)

精神的に殺ししなり (A・B・C) 豊太郎の相沢を憎む心。

我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか (C) 襦袢 (B)

精神の作用はほとんど廃して (A) 豊太郎との別れを告げられたエ  
リスの衝撃や絶望感。

生ける屍 (A・B・C) 千行の涙 (B・C) エリスの痛ましい姿や

エリスを不幸にしたことへの豊太郎の後悔や辛さ、悲しみ。

17 (72)

相沢謙吉 (B・C) 人物像。

良友 (A・B・C) 相沢が良友である理由。

脳裡 (脳裏) に一点 (B・C) 憎むころ (A・B) 憎む理由。豊  
太郎の心情や人物像。

今日 (A) 相沢を憎むころは永遠に残るのではないかという見解。

前述の内容は、主人公である豊太郎の行動や心情をまとめていた  
もの (A)、場面に応じて豊太郎と関係する人々についてまとめてい  
るもの (イ) 情景や事物を象徴的にとらえ、登場人物の状況や心情  
と結びつけているもの (ウ) の三点に整理される。(A) が最も多い。  
それぞれが選択した言葉を通して、登場人物に寄り添い、読み取っ  
たことや感じたこと、考えたことなどを自分の言葉でまとめ、心情  
や人物像を深くとらえようとしていた。

(A) については、主に、豊太郎の人物像、決意・志、自我の目覚  
め、状況・行動・心の変化、エリスへの愛や関係の深まり、母の死  
による衝撃、学問への思い、新たな見識を得たブライド、葛藤や迷  
い・苦悩、エリスの妊娠への不安、弱き心、選択と承諾、ロシアで  
の自負、エリスへの後ろめたさ・離別の心、罪悪感・自責の念、相  
沢を憎む心がまとめられている。

(イ) については、エリスに関して、状況・人物像、豊太郎への愛  
や信頼、別離への予感や不安、切実な願い、帰国を知った衝撃・絶  
望感などが述べられている。相沢についてはその人物像や豊太郎と  
の対比が述べられる。

(ウ) については、〈冬のヨーロッパ〉〈灯火〉〈雪〉〈一星の火〉な

どを豊太郎やエリスの運命と結びつけていた。

生徒は、自分が語るためのキーワードやキーセンテンスを選択するとき、担当範囲の内容をどうとらえるか、思考をめぐらしていただろう。取りあげた言葉には共通のものも多くあり、それらはその範囲における核になる言葉、小説から浮かび上がってくる言葉であつたかと考えられる。生徒は取りあげた語句をもとに見解をまとめるにあたり、一部、記号を用いたり、箇条書きにしたりしたものもあつたが、基本的には文章化している。文章化の試みからは、長短や内容の差があつても、自身の考えを深めようとする意識がうかがえた。

Ⅱ 平成二六、二七、二八年度は、資料の上位に本文を載せ、下段に「気づき・解釈・感想・疑問等」、資料の左端に「全体を通して考えてみたいこと・感想」を書かせる形式にした。(資料4)

次は二八年度二〇名(1)～(20)の生徒の資料内容の特徴を発表順にまとめたものである。なお本年度は単元終了後、5項目について「できたこと」「もう一歩だと思ふこと」を書かせている。

(1) 主人公の心情や状況について、叙述を押さえつつ自分の言葉でまとめている。

(2) 本文中の細かな表現に着目していた。「某省に出仕して」という箇所については「豊太郎は過去の栄光をどうでもよく思っている。誇りに思っていたら『某』とは言わずきちんと覚えていいる」とまとめ、「隊々の士女を見よ」について「読者はわかるはずがないのにその当時に戻ったかのように表現している。ベルリンでの印象が鮮明

であつたことがうかがえる。」と述べていた。

(3) 各段落から読み取れる登場人物の状況と人物像を自分の言葉で簡潔にまとめており、生徒からも「よく理解できた」「豊太郎の人物像がわかりやすくまとめられている」などの感想が述べられた。

(4) 担当箇所の前の部分も踏まえつつ、丁寧に整理されている発表資料で豊太郎の変化がよく理解できたという感想が多くあつた。

(5) 叙述に即して豊太郎の人物像をまとめていいる。「どこの文の表現を説明しているのか分りにくい点もあつたのでもう少し見やすくまとめられたらよかった。」という反省点をあげていた。

(6) 疑問に思つたことをあげつつ、自身が考えたことを整理していいる。比喩の説明や対比的な叙述についての確な説明をしていた。助動詞の文法的意味、敬語の種類、省略語の補足を本文に書き込んでいた。

(7) エリスと豊太郎の状況や人物像を自分の言葉でまとめている。「本文から読みとれることをもう少しプリントにまとめておけばよかった」と反省していたが、書ききれていない内容については口頭で説明していた。

(8) これまでの本文の展開を整理した上で、担当範囲の一文目「ああ、なんらの悪因ぞ」についての解釈を示し、次の展開をまとめるという工夫されたものであつた。母の死の理由について考えられることを①偶然の病死②豊太郎が解職されたことに対する恥ずかしさからの自死③踊り子と交際していることの恥ずかしさからの自死として三点整理していたが、当時の郵便制度からして②は考えられないとの説明があつた。また母の手紙の内容について考え得ることを

まとめていた。

(9) エリスの人物像やエリスとの交際の変化について簡潔に説明している。「母にはこれを秘めたまへと言ひぬ」の理由など叙述に即してわかりやすく説明していた。

(10) 疑問点をあげながら、自分の見解を示している。エリスのことが「彼」と表現されていることへの気づきを述べる。人物関係がともわかりやすく整理されていて、他の生徒も絶賛していた。

(11) 「我が学問は荒みぬ」の繰り返し、「異にて」や「よりはむしろ」「ことさらに」という比較に関わる表現、「されど」という逆接表現に着目し、豊太郎の〈今まで〉と〈現在〉の生活や心情を比較している。

(12) 豊太郎やエリスの発言や表情、心情に関わる叙述を押さえつつ、心情を丁寧にとめている。

(13) 記号や図を有効に使いながら、担当箇所の内容を丁寧に整理していた。「我が失行」や相沢の考えなど明快にまとめていた。担当者は、国名の漢字表記や鷗外の漱石観、「舞姫」がもとになっている歌詞を示した補足参考資料も作成している。

(14) 一文一文を丁寧に押さえつつ、豊太郎の心情や人物像を読み取り、自分の言葉でまとめている。

(15) 形式段落ごとに整理しながら、疑問点を出し、自分なりの解答を作るという流れでまとめている。

(16) エリスの手紙の内容、豊太郎の置かれた状況について、わかりやすく整理している。

(17) 図式的に豊太郎とエリスの思いを表している。問いをたてつつ

担当者の解釈を示している。

(18) 〈気づき〉〈疑問〉〈感想〉として整理している。自分が豊太郎の立場だったらどうするかという点についても考えている。

(19) エリスの言葉、エリスの様子、豊太郎の様子を押さえつつ、感想をまとめている。

(20) 当時の時代背景（日本・西洋）を説明する。現代語訳し、豊太郎の人物像をまとめている。「良友」とはどういうことか、「憎い」のはなぜか、どうすればよりよい結末を迎えることができたのだろうかという疑問点を提示し、自分の考えをまとめている。

ほとんどの生徒が担当箇所における登場人物の状況、心情、人物像を叙述に即しながら自分の言葉で明快に説明していた。矢印などの記号を使用しながら段落の展開に沿ってまとめているものが多いが、人物関係をうまく図式化して示したものもある。また叙述の展開に沿ったまとめ方ではなく担当箇所の内容を捉え直し、わかりやすく構造化しているものもあった。またわかりやすくするために担当箇所の内容をまとめて資料に加えるという工夫をしていたものもあった。疑問点をあげ、その疑問点についての自身の見解をまとめるという形式をとったものが数名いる。その他古文学習のように、助動詞の文法的意味・敬語の種類・省略語の補足を資料本文に書き込んでいたもの、細かな表現に着目して、自分の解釈を書いていたもの、主人公の今までの現在の生活や心情を比較するのに、接続詞や副詞などを抜き出し説明していたものがあった。全体として発表資料はそれぞれ工夫されており、生徒は他者の資料から学び



4  
おわりに

Iでは取り上げた語(語句・文)を軸にして、自身の見解を文章化することにより発表内容は焦点化される。またその言葉からの広がりや含みを考慮しようとする意識がうかがえた。

担当者の報告終了後は、解釈の違い・補足、疑問点、新たな気づき、感想等を出し合う対話学習を展開したが、別稿でまとめようと考えている。

## 参考・引用文献

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』2

014年 東信堂

堀哲夫「認知過程の外化と内化を生かしたメタ認知の育成に関する研究」2009年 山梨大学教育人間科学部紀要

(広島大学研究生)

三年 現代文 「舞姫」 学習の手引き 三年（ ）組（ ）番（ ）

## ★ 學習目標

- ① 主体的に理解する態度を養うとともに、互いに読みを深め合う。
- ② 豊太郎の置かれている状況と、状況に応じた行動・心情を把握する。
- ③ エリスの心情を理解する。
- ④ 豊太郎と相沢の人物像を考える。
- ⑤ 難語句の意味や表現技法を理解する。
- ⑥ 時代背景を踏まえて、豊太郎の生き方について考える。

★ 学習の手

- 1 全文を通読する。
- 2 ワークシートに従って作業する。

- [illegible]

○担当箇所から「何が」を解読する上でキードとしてまず「援出」を出す。  
 「評論文や解説文を読めるようになる」というキードではなく、各自が語るためのキードとせよとする。）  
 ○キードになる語句、語句を軸に各自の意見を調べる。  
 ○担当箇所における、「難問」の意味を調べ、

本文全体を通して読む際の感想や考えをまとめる。

○担当箇所における感想や考えをもとに、一人ひとりに授けられて報告する。担当箇所をまず朗読するのでそこから始める。

声の大きさを

3

キーポイントを気づいて報告する。担当箇所を質問したいところをメモする。

4

疑問を聴いて、ワークシートに感想や質問したいところをメモする。

5

各段ごとに読み合い、各段落ごとの読み取りを終えた後、話し合い、整理する。全体を通して考えたことについて、は段階ごとと感想を取りあう。



担当箇所 (5) (P. 219 14 5 P. 222 12) (組番)

十一になる諸句	氣づき・解釈・感想等	絶句を載せて一頁附・絶句
憐憫の情	<p>           豊太郎は臍痛だ、たゞ、その臍痛で用心深い豊太郎の心に憐憫の情が勝つてしまふほど、エリスの涙には、エリスの辛い現状がうつしてだされてゐたのだと思う。また、そゝまで豊太郎の心で動かしつゝのは、豊太郎がエリスに、何かしら慰まつけられることがあつたからかもしれない。         </p>	
涙の泉	<p>           エリスが、涙が止まらないほど深く父の死を悲しんでゐると思つた。同時に、エリスは愛人になるように言つてゐるグイクトリアの座の座頭くちどさや、それに使われないからとつてエリスをばつたエリスの母のあどさつらく思ひ、悲しんでいるので、何重にも悲しみが重なり、涙が泉からわき出るように止まらないやうなうと思つた。         </p>	
君は 善き人なり	<p>           エリスにとって、泣いてゐる自分とずんずんかゝつてゐた豊太郎は救ひの手で、ましのバツてゐてゐるに感じたのだらう。父が死に、座長と母はエリスの氣持をを理解してくれず、孤独となつてゐたエリスは、今の状況と話し、理解してくる人が必要だつたのだと思つた。豊太郎は自ら手をかりてくれて、座頭やような下心もなさうで、信頼できたのだらう。         </p>	

◇次は二・三・四・五年度の発表資料で生徒が取りあげていたキーワードやキーセンテンスを整理したものである。

◇担当クラスの生徒数は、二・三年度が23名で、四・五年度が17名である。表は担当順に整理している。

◇（ ）内の数字は「舞姫」の形式段落番号である。

◇各年度共通するキーワードについてはアンダーラインを引いている。

A 二十三 (2011) 年度 キーになる語句	B 二十四 (2012) 年度 キーになる語句	C 二十五 (2013) 年度 語句・文
1 ○石炭をばはや積み果てつ (1) ○別に故あり (1.2) ○人知らぬ恨み (2)	1 ○これには別に故あり (1.2) ○人知らぬ恨み (2)	○石炭をばはや積み果てつ (1) ○平生の望み足りて、洋行の官名をかうむり、(1) ○瑞西の山色をも見せず、伊太利の古跡にも心をとどめさせず (2)
2 ○太田豊太郎 (4)  ○我を養ふ外物を遮ざりとどめたりき (5)  ○をさなき心 (8)	2 ○伯林の都に來ぬ (4)  ○常に我を養ふ外物を遮ざりとどめたりき (5) ○政治学を修めん (7)	○我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて (4) ○されど我が胸にはたとひいかなる境に遊びてもあだなる美観に心をば動かさじの誓ひありて常に我を養ふ外物を遮ざりとどめたりき (5) ○さて官事の暇あるごとに、かねて公の許しをば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めんと、名を簿冊に記させつ (7)
3 ○所動的、器械的の人物 (9)  ○昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり (9)  ○広言しつ (9)	3 ○好尚 (9) ○奥深く潜みたりしまことの我 (9)  ○大学 (9)	○かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時來たれば包いても包み難きは人の好尚なるらん、○奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり (9) ○余はひそかに思ふやう、～法律たらんは忍ぶべからず (9) ○今までは～広言しつ (9)

4	○我が心 (11)  ○勇氣 (11)  ○我が本性 (11)	4	○我が本性 (11) ○弱くふびなる心 (12) ○冤罪 (13)	○心のままに用ゐるべき器械・独立の思想をいできて人並みならぬ面もちしたる (10) ○我が心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我が心は処女似たり (11) ○嗚呼、かれも一時、船の横浜を離るるまではあつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなか我が本性なりける。この心は一生じけん (11)
5	○恍惚 (14) ○憐憫 (16)  ○救ひ (18)	5	○憐憫の情 (16) ○涙の泉 (17) ○君は善き人なり (17)	○我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれ〜我ながら我が大胆なるにあきれたり (16) ○あとは歎歎の声のみ。我が眼はこのうつむきたる少女のふるふ項にのみ注がれたり (19) ○彼は物語するうちに、覚えず我が肩に倚りしが、この時ふと頭をもたげ、またはじめて我を見たるがごとく、恥ぢて我がそばを飛びのきつ (20)
6	○貧苦 (21)   ○媚態 (23) ○時計 (24)	6	○人の見るが厭わしき (21) ○茫然 (22)  ○媚態 (23)	○さきの老嫗は慇懃におのが無礼の振るまひせしを詫びて、余を迎へ入れつ (22) ○金をば薄き給金を割きて返しまゐらせん。よしや我が身は食はずとも。それもならずば母の言葉に (23) ○その見上げたる目には、人に否とは言はせぬ媚態あり。この目のはたらきは知りてするにや、また、自らは知らぬにや。(23)
7	○一輪の名花を咲かせたり (26) ○舞姫の群れに漁するもの (26)  ○我が一身の大事は前に横たはりて (29)	7	○母の死 (27)  ○舞姫 (28)  ○離れがたき仲 (29)	○さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり (27)  ○余は彼が身の事に関はりしを包み隠しぬれど、彼は余に向かひて母にはこれを秘めたまへと言ひぬ (28) ○我が一身の大事は前に横たはりて、〜ここに及びしをいかにせん (29)
8	○相沢謙吉 (31) ○免官 (31) ○休息所 (33)	8	○身の浮かぶ瀬あらじ (30) ○相沢謙吉 (31) ○助けの綱 (32)	○公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。この時余を助けしは〜相沢謙吉なり・助けの綱を〜エリスなりき (30〜32) ○余はキョオニヒ街の間口狭く奥行きのみいと長き休息所に赴き〜材料を集む・この載り開きたる引き窓より光を採れる室にて〜臂を並べ〜幾たびとなく往来す日本人を、知らぬ人は何とか見けん (33) ○また一時近くなるほどに〜ありしなるべし (33)
9	○学問 (34. 35)  ○議論 (35) ○留学生 (35)	9	○我が学問は荒みぬ (34. 35) ○法令条目の枯れ葉 (34) ○一隻の眼孔 (35)	○余は別に一種の見識を長じき (35) ○そをいかにといふに、およそ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にて独逸に若くはなからん (35) ○同郷の留学生などのおほかたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ (35)
10	○冬は来にけり (36) ○朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり (36) ○心は楽しからず (37)	10	○氷・雀の死・おぼつかなし (36)	○今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。(37)
11	○なにゆゑにかく不興なる面もちを見せたまふか (39) ○我が豊太郎の君とは見え (39) ○微笑 (40)		○手紙・不興なる面もち (39) ○エリス・富貴・見棄てたまはじ (39)	○否、かく衣を更めたまふを見れば、なにとなく我が豊太郎の君とは見えず・よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見棄てたまはじ (39)  ○大臣は見たくもなし (40)

12	○相沢 (41) ○諫むる (43)	11	○生路 (42) ○弱き心 (43) ○信用 (43)	○貧しきが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛 (44) ○余は守るところを失はじと思ひて、己に敵するものには抗抵すれども、友に対して否とはえ対へぬが常なり (44) ○別れて出づれば風面を撲てり。二重の玻璃窓をきびしく鎖して、～午後四時の寒さはことさらに堪へがたく、膚粟立つとともに、余は心の中に一種の寒さを覚えき (45)
13	○重霧 (44)  ○寒さはことさらに堪へがたく (45)			
14	○いかで命に従はざらん (47) ○偽りなき我が心を厚く信じたれば (48)	12	○いかで命に従はざらん (47) ○常ならぬ身 (48) ○偽りなき我が心 (48)	○いかで命に従はざらん (47)
15	○心細きこと (49) ○うしろめたかる (49) ○この間仏蘭西語～余なりき (50)			○出で行くあとに残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんにはうしろめたかるべければとて (49) ○青雲の上におとしたり (50)
16	○忘れざりき (51) ○灯火 (51) ○第一の文 (51)	13	○エリス (51) ○文 (51)  ○地位 (職・未来・望み) (53)	○袂を分かつはただ一瞬の苦難なりと思ひしは迷ひなりけり (52) ○本国に帰りて後ともにかくてあらば云々 (54)
17	○我が地位 (53) ○胸中の鏡 (53)			
18	○糸 (55)  ○我が心 (57)	14	○寂然たり (55)  ○低徊踟躕 (57)  ○あだし名 (60)	○独逸に來し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、～誇りしにはあらずや。(55) ○よくぞ帰り來たまひし。帰りたまはずば我が命は絶えなんを (56) ○戸の外に出で迎へし～エリスはうち笑みつつこれを指さして～取り上ぐるを見れば襤褸なりき。「我が心の～君に似て黒きひとみをや～よもあだし名をば名のらせたまはじ。」～見上げたる目には涙満ちたり (59, 60)
19	○襤褸 (60) ○黒きひとみ (60) ○涙満ちたり (60)			
20	○特操なき心 (61) ○承りはべり (61) ○罪人 (64)	15	○心の錯乱 (62) ○罪人 (64)  ○死人 (66)	○さまざまの係累もやあらんと相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落ち居たりとのたまふ (61) ○帰りでエリスに何とか言はん (62) ○我が脳中にはただただ我はゆるすべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき (64)
21	○一星の火 (65) ○痛み (65) ○雪 (66)			
22	○精神的に殺ししなり (68) ○精神の作用はほとんど全く廃して (70) ○生ける屍 (71)	16	○恩人は彼を精神的に殺ししなり (68) ○襤褸 (69) ○生ける屍を抱きて千行の涙をそそぎしは幾たびぞ (71)	○この恩人は彼を精神的に殺ししなり (68) ○我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか (69) ○エリスが生ける屍を抱きて千行の涙をそそぎしは幾たびぞ (71)
23	○良友 (72) ○憎むところ (72) ○今日 (72)	17	○相沢謙吉 (72) ○良友 (72) ○我が脳裡に一点の彼を憎むところ (72)	○嗚呼、相沢謙吉がとき良友は世にまた得難かるべし (72) ○良友 (72) ○されど・脳裏に一点 (72)

— 70 —